

教員養成大学・学部におけるヴァイオリン指導の原理

—「弦楽器演習」の実践記録を手がかりに—

伊藤 誠*

キーワード：ヴァイオリン、教材開発、授業実践、器楽指導、教員養成

1. はじめに：「弦楽器演習」の位置づけ

演習形式によるこの授業は、教育学部が開講する半期1単位の選択科目である。また「中等教科専門科目」の一つでもある。つまり音楽専修生のみならず、教育学部の他専修、また他学部の学生も希望すれば履修することができる授業である。昨年度も、音楽専修以外の1年次生2名が受講を希望した。中学校音楽の1種免許状を取得するためには「中等教科専門科目」の中から、最低19単位を修得しなければならない。その必要条件から、音楽専修生ではない学生が若干名ではあるが受講する。また、この授業がきっかけになってヴァイオリンに興味をもった場合は、復習を兼ねての重複履修も可能である。単位は「自由選択科目」8単位の中にカウントされる。これも昨年度の例だが、音楽専修の学生が1名だけ2年続けて履修している。

2. 授業内容とカリキュラム

その詳細を資料1としてまとめた。昨年度は計13回の授業を実施した。なかでもアンサンブルによる「奏法研究」に多くの時間をかけたが、あまりそればかりに集中しすぎないように、ま

た授業内容が単調にならないように「ヴァイオリン変遷史」の講義や「名ヴァイオリニストたちの映像」を鑑賞させながら、個性的な楽器の構え方あるいは演奏スタイルについてディスカッションする時間も設けた。前者については注3に示したように、バロックヴァイオリン、モダンヴァイオリン、ポシェットヴァイオリンという、構造や様式の異なる3種類の楽器を見せながら、音（音質、音量、音程等）を比較させたり、楽器の特徴や弦の素材の相違点について解説したりした。同時に弓についてもバロックボウ、クラシックボウ、モダンボウの3種類を示し、楽器の変遷にともなって弓にも改良と発展の歴史があったことを講義した。

授業のシラバスに「読譜できる（＝楽譜を読むことができる）ことが望ましい。」と明記しているためか、上記のように他専修の学生が履修してもせいぜい数名に限られている。主に声楽やピアノの実技を通して、日頃から楽譜に慣れ親しんでいる音楽専修の学生ですら、これまでにヴァイオリンを弾いたことがある者はほんの一握りである（昨年度は24名の受講生のうち、経験者はわずか2名であった）。初心者同然の学生たちに対して、半期完結の授業で何ができるだろうか。自分で音程や音色をつくらなければならない作音楽器の醍醐味をどう味わわせてらよいいのかについて、毎年度綿密な指導計画を

* 埼玉大学教育学部音楽教育講座

資料1 「弦楽器演習」の流れ（平成20年度・後期：全13回）

日付		主な内容	主な教材	特記事項	欠席者数
10/3	1*	ガイドダンス／楽器の仕組み		「小さな世界」で長弓と部分弓の説明	1
10/17	2	pizz. 奏法		4弦すべてを使って	4
10/24	3*	ヴァイオリンの変遷史について		3種類の楽器を用いて ³⁾	5.5 ²⁾
11/7	4	弓の持ち方／部分弓／移弦のタイミング	わらべうた ¹⁾	音階練習の導入（D durから開始）	5
11/14	5	リズムを変えて様々なBowng		カデンツァの分奏／グループ別学習	4
11/21	6	2OctのD-dur／長弓の多用	主人は冷たい土の中に	Change Position／写真撮影 開始	8
11/28	7*	名ヴァイオリニストのVTR鑑賞		「譜面台」の登場	3
12/5	8	アンサンブルの楽しみ	Banjo Tune ⁴⁾	第1指マーク用のシールをはがす	3
12/12	9	「主人は冷たい土の中に」仕上げ		初めてのVTR収録	4
12/19	10	これまでの復習		音楽科教育における器楽指導の位置づけ	6
1/9	11	曲の雰囲気や体で表現	Polka ⁵⁾	「指揮者」の体験	6
1/16	12	即興表現にチャレンジ	かごめかごめ	弦楽器の特殊奏法	1.5
1/23	13	スラーとBowng	おおスザンナ	Bowngをそろえて	1.5

* 講義形式で行った授業（他11回は演習形式）

1) おはよう、一番星、チョッパー、ばしゃときしゃ、はなのの ののはな、ころぶなこうま、かごめかごめ

2) 遅刻は0.5扱いにしている。

3) バロックVn、モダンVn、ポシェットVnを使用した。

4, 5) 出典：New tunes for strings (Book one) by Stanley Fletcher, Boosey & Hawkes 1972



写真1 ヘア学習（2007/11/29）



写真2 「指揮者」の体験（2007/12/20）

立てて臨むようにしている。授業の雰囲気は、掲載した写真1～3から汲み取って頂きたい（撮影年度は2年間にまたがっている）。奏法研究を主体とした授業にもかかわらず、今回は年度末の実技テストを一切実施しなかった。ヴァイオリンを深く味わうこと、そしてアンサン

ブル活動に時間をかけたかったことが主な理由だが、それよりも彼らが近い将来、器楽指導においてさまざまな発音原理をもつ楽器を子どもに与えるときの「心構え」にしてほしいと考えたからである。

準備ができた学生から調弦（チューニング）



写真3 アンサンブルの楽しみ (2008/01/10)

を行い、弓の毛には松脂（ロージン）を適宜塗る。初心者にとって調弦はむずかしく、また弦を切ってしまう危険性が高いため、この作業は最後まで筆者が行った。チューニングをおろそかにすると、言うまでもなく音程が不揃いなアンサンブルになってしまうため、授業の準備は入念に行った。

3. ヴァイオリンの技法

(1) 右手について

授業が始まって2～3回のうちは、まだ弓の持ち方や弓の動かし方（ボウイング）について一切触れないようにしている。なぜならば、右手の技術は初心者にとって左手以上に難解であり複雑だからである。この段階は楽器に親しんでもらうことの方が先決であるから、しばらくピチカート奏法を駆使して、第1ポジションにおける音程づくりを行っていく。ピチカートは右手の人差し指で弦をはじくだけであり、はじく場所さえ間違えなければ簡単にできる奏法である。右手の負荷を最小限にして、左手の技術に集中させるねらいがある。ヴァイオリン奏法とは、簡単に言ってしまうと左手が音程づくりをつかさどり、右手が音質・音量・アーティキュレーションをコントロールする。つまり両者がまったく異なる作業内容を同時に（しかも同時に）行うところが、初心者にとって難しいと

感じてしまう点である。

ピチカートの世界を味わったあとは、いよいよ弓を操作して音を出す段階へと進む。ヴァイオリンが擦弦楽器の仲間であることを実感する瞬間であるが、弓の持ち方が思うように決まらないため、最初からつまずく学生が続出する。弓を持つ5本の指の相対的な形ばかりを注意しても、彼らは戸惑うばかりである。要は、人差し指と小指の役割について説明することが大切なのである。そこで（1）弓をただ弦の上ですべらせても楽器は鳴ってくれない。人差し指を中心に弓に適度なウエイトをかけなければ弓の毛が弦に吸い付かないからである、（2）小指は弓のスティック（木の部分）の上に指の関節を曲げて置くようにする。なぜなら弓のバランスは小指がその役割を担っているからである、という2つの注意を与えると少しずつ様になってくる。

この両方の指の動きは、決して目で確認することができない。したがって「表現観察」「演奏観察」を通して、一人ひとりをきびしく評価する必要がある。弓を持つ場所が端（元の部分）であるため、例えば下げ弓（ダウン・ボウ）の場合、弓が元から中ほどを経由して先へ移動する間に、弓にかかるウエイトは刻々と変化する。またそれに伴って、バランスのとれた水平方向の動きを維持するために、小指の指先で感じる弓の重みも一定ではない。このような理由から、初心者に対して最初のステージから全弓の学習をさせることはむずかしいはずであるが、初歩の段階から全弓練習を執拗に課すヴァイオリン教則本が多いのには困惑してしまう。わらべうたを初歩教材に選ぶのは、左手の事情のみならず右手（ボウイング）にも明確な理由がある。すなわち、比較的軽快な速さと歯切れよさを併せ持ったわらべうたを弾く場合は、全弓をあまり使わず、最も弓を操作しやすい中ほどを使って半弓（部分弓）主体に練習できるからである。そして少しずつ弓の幅を上下に広げていくようにすれば、やがて美しいストローク

の獲得へつながるだろう。

(2) 左手について

ここではヴァイオリンの音程づくりに関することを中心に述べたい。難易度に沿った教材の流れは、数曲の「わらべうた」から出発し、左手の形が整ってきたところを見計らって二長調の音階と分散和音、さらに基本的なカデンツァ(曲の終結を形づくる和声進行の定型)をパート別で合わせ、美しいハーモニーを味わわせる。その後、機能と和声でつくられた楽曲(芸術曲)へと進む。芸術曲が導入される段階(第6回目)になって、はじめて譜面台に置かれた楽譜を二人で見合いながら練習するという、弦楽アンサンブルらしい学習形態がここに生まれる。ヴァイオリンの指板(ネックに装着された黒檀でできた細長い板)にはギターに付けられているようなフレットはない。したがって応急処置ではあるが、左手の人差し指を押さえる場所にだけ丸いシールを貼ることにしている。しかし元来ヴァイオリンは左手の指を見ながら演奏する楽器ではないため、このシールも授業が全行程の1/3ほど経過した頃には、全員に剥がすよう指示する。

導入段階で取り上げるわらべうたは、わらべうたなら何でもよいというわけではなく、音階のように隣同士の音で動くところが少なく、できるだけ半音を含まない音列でつくられている曲を選ぶようにしている。いわゆる五音音階(ペンタトニック)でできているものが左手のフォーメーションづくりに有効だからである。それは、各指が比較的自由に独立して動かせるためであり、また曲が短いため一曲の中で使われる音の種類(高さ)が限られているためでもある。カデンツァにしても楽曲にしても、なぜ「二長調」を最初に取り上げるかといえば、ハ長調をはじめ特にフラット系の調(短調は言うに及ばず)よりも、この調が音程づくりにとって、もっとも容易だからである。ヴァイオリンの場合、完全五度という間隔で各弦がチュー

ニングされる。開放弦(調弦したときの、左手で押さえない状態の弦)で得られる音程は、下からト、一点ニ、一点イ、二点ホの順になっている(弦の名称はG線、D線、A線、E線という)。二長調の音階を弾くときは、張られた4本のうち、真ん中の2本の弦(D線とA線)が使われる。二長調の主音は一点ニ(D線の開放弦)、属音は一点イ(A線の開放弦)であるが、一つの調の中でもっとも大切な機能をもつ主音と属音がどちらも開放弦によって得られることは、初心者を指導するうえで十分に活用すべき点である。チューニングさえ正確であれば、両者の正しい音程が簡単に得られるからである。また開放弦は弦の振幅が大きいので、指で押さえて弦の長さを短くした状態よりも、より豊かな響きが得られるのである。二長調の音階を弾くための指使いは、D線もA線も同じである。指番号で示すと「0-1-2-3」(0は開放弦、1は人差し指、2は中指、3は薬指をいう)となる。音階を弾くとき、前半(レからソ)の音階がD線上で「0-1-2-3」、後半(ラからレ)の音階がA線上で「0-1-2-3」となるわけであるが、小指を含む4本の指の相対位置(同一弦上における指の並び方)は両弦において共通である。

(3) 構え

ヴァイオリンの構え(支え方)については、(1)体の正面に対して、左へ30~45度の角度で構えること、(2)左の鎖骨を意識してその上に楽器を乗せて、あごを顎当ての上に置く(あごと顎当てが離れないようにするが、決して左肩を持ち上げない)、(3)左腕は脇を固めて楽器を支えるという意識で構える、という最低限守ってほしい3つの注意のみに留めた。多少楽器を低く持っていようと、首が左右どちらかに傾いていようと、上記3つ以外の細かいことは触れないようにした。個々の構えや姿勢は十人十色で実に面白いものである。なお肩当ては使用させなかった。その理由は、左肩を開放

したかったことと、各自好きなように楽器を構えてもらいたかったからである。

4. 教材開発とその手順

I. かごめかごめ

「かごめかごめ」を教材にして、楽譜1のように（「うた」の旋律のほかに）3つの伴奏パートを学生たちに課した。この3つは、いずれもオスティナートとして呈示した。すなわち曲の前奏から始まり後奏に至るまで、指定されたパートを何度もくり返し演奏する。「かごめかごめ」のメロディを歌うパート、その旋律をヴァイオリンで弾くパート、そしてこの3つのオスティナートのパートという、5つのパートに分かれてのアンサンブル活動である。つたない筆者のアレンジである。

楽譜のところどころに記されている□はダウン・ボウ（下げ弓）、∨はアップ・ボウ（上げ弓）のことである。pizz. はピチカート、arcoは弓で弾くことを表している。第2パートの「三角の音符+波線」の記号は（筆者の創作ながら）弓を駒のあたりに軽く打ち付けて小刻みにバウンドさせ、故意に擦れたザラザラした音を出すための奇をてらったものである。板書した楽譜には書かれていないが、ヴァイオリンを膝の上に立てておいて、右手でこぶしを作った状態で裏板を（あるいは平手で側板を）一定のリズム

楽譜1 「即興表現にチャレンジ」(2009/01/16)

で叩くという打楽器のような効果音も加えてみた。これは、お互いのパートを聴き合いながら楽しい雰囲気の中で、いろいろな弦楽器特有の奏法を体験させることが主な目的であった。

II. ポルカ

この曲集では、どの楽曲にも1頁目右上に枠線に囲まれた「数字」が示されている。これは作品を弾くために必要な「指の番号」である。「ポルカ」では0、1、3と表記されている（楽譜2）。つまり、この曲は中指と小指を使わないで演奏できる、ということがわかる。0は開放弦を意味するため、実際に使う指は2本（人差し指と薬指）だけということになる。

上段（Tune）が初級者用のパート、下段（Advanced Accompaniment for Duo）には上級者のための伴奏パート（2人で弾き合うことも可能）が用意されており、学習者のレベルに

楽譜2 New tunes for strings (Book one) by Stanley Fletcher, Boosey & Hawkes 1972, 16p.

よって担当するパートを自由に組み合わせることができるようになっている。言うまでもなく0、1、3だけで弾くことができるのは上段パートのみである。曲のシンプルなところはフィンガリングのみならず、和声進行についてもいえる。全18小節からなるこの教材の和音機能は、トニック（T）に始まり、6小節目からドミナント（D）、9小節目からT、13小節目からサブドミナント（S）、16～17小節目がD、18小節目がT、というように分析できる。すなわち曲の前半がT-D-T、後半がT-S-D-Tという典型的な2つのカデンツァが連結された形になっている。

元来「ハ長調」は、ヴァイオリンにとって（特に初級レベルの学習者にとって）音程が取りにくい調の一つである。調の主音や属音が開放弦や第1指で得られないため、慎重に扱わなければならない調の一つということができる。しかしこの作品のユニークな点として、（1）ハ長調の音程をむずかしくさせている第2指の音（二点F音、あるいは派生音）を、すべて下段パートに弾かせるようにしていること、（2）頻出する一度の和音には、第6音（イ音）と第9音（ニ音）を加えて「付加和音」の一種として扱い、単調なハーモニーにならないよう工夫されていること、（3）開放弦から得られる音を、できる限り和音の構成音の一つに組み入れて、より明るい響きを引き出そうとしていること、（4）初歩教材として第1指と第3指を積極的に使用させることによって、特定のポジションにおける左手フォーメーションの形を無理なく学習させようとする意図が伺われることである。これらの点から、作曲者自身のヴァイオリンに対する見識の深さを十分に感じ取ることができる。

5. 第8次学習指導要領との関連

前述（「2. 授業内容とカリキュラム」）のように、この授業の主なねらいは集団学習におい

て器楽合奏をさせるときの、教師がもつべき楽器に対する姿勢を身に付けるために行うことであり、学生個々のヴァイオリン演奏技術を向上させることではない。この視点に立って、学校教育における今後の器楽指導に向けた学習指導要領の文言をあらためて読み返す必要があるだろう。

昨年3月に告示された学習指導要領の内容構成の見直しについて、ここでは小学校音楽の「器楽領域」に限定して述べたい。主にその変更点を6点あげることができる（資料2）。この中で特に押さえない項目は3番目と5番目である。一つは「音色、リズム、速度、旋律、強弱、拍の流れやフレーズという音楽を形づくっている要素が、低学年から〔共通事項〕の中に明記された……」というものである。この明解な表記によって音楽を特徴づけている諸要素は、低学年の段階から表現及び鑑賞の2つの領域の中で系統立てて指導することがはっきり示されたといえる。これは言うまでもなく、今回新設された〔共通事項〕の性格そのものを示すことでもある。

今一つは、器楽の活動に関する（2）エの文章で「……伴奏を聴いて、音を合わせて演奏すること」というものである。これに類似する文章として、現行の学習指導要領にも「互いの歌声や楽器の音、伴奏の響きを聴いて演奏すること。」とA表現の中の（2）ウで謳われているが、この一見当たり前の一言は、現行では「低学年」でしか表記されていない。つまり「ウ」という項目は、中学年や高学年では謳われていない。楽器で表現する際、先生のピアノ伴奏をよく聴きながら演奏しましょうとか、子どもたち同士でアンサンブルするときなど、お互いの音を聴き合って演奏するようにしましょう、という意味合いが含まれた大切な一文ではないかと考える。演奏表現には欠くことができないこの文言が、今回の改訂によって低中高すべての学年共通に示されたことは、評価に値することではないだろうか。

- (1) 学習領域が整理されるとともに、指導内容も「歌唱」「器楽」「音楽づくり」「鑑賞」の順に並記された。
- (2) 〔共通事項〕が新設された。
- (3) 「音色、リズム、速度、旋律、強弱、拍の流れやフレーズ」という、音楽を形づくっている要素を具体的に表す言葉（ターム）が、低学年の段階から明記された。
- (4) 音符や休符、諸記号など、学習状況を考慮して取り扱う音楽用語の数が30から37に増えた。
- (5) 「……伴奏を聴いて、音を合わせて演奏すること。」（器楽の活動－(2)エ）という文言が、すべての学年に統一的に挿入された。
- (6) 移動ド唱法の扱いについて「階名唱については移動ド唱法を原則とすること。」（現行）から、「相対的な音程感覚を育てるために、適宜、移動ド唱法を用いること。」となった。

表現と鑑賞の各活動を通して、例えば自己のイメージや思いを演奏によって伝えたり、あるいは他者の演奏に共感したりすることができる児童を育成しようとするならば、音を音楽へと構成していく楽しさや達成感を、まずは学生自身が実感しなければならないと考えたのである。この授業でアンサンブル活動に多くの時間を費やした理由はそこにある。

6. まとめ

本論文では、筆者が担当する「弦楽器演習」における授業実践を通して、初心者を対象とするヴァイオリンのための指導手順及び教材開発を中心に述べた。ヴァイオリンを演奏するうえで、左手（主に第1ポジションにおける音程づくり）と右手（アーティキュレーション、音量や音質の操作）の技法は、初心者にとっては思いのほか難解である。

最後にもう一度述べることになるが、この演習では大きく2つの目標を掲げて毎年実施している。一つは弦楽器という作音楽器の特性を、学生たちに十分味わってもらうこと、もう一つ（むしろこの目標の方が大切と考えるが）のね

らいは、「楽器」に対する敬虔な姿勢を身に付けてもらうことである。しかし十数回（1コマ90分）の授業ではせいぜい学習できる範囲は限られているため、あくまでヴァイオリンの演奏能力を高めることは本義としていない。機能と声の中にモード（旋法）の要素を取り入れた作品、活発なストローク（運弓法）を使うために細かい音符を多用し快活なテンポをもつ作品など、初心者にとって比較的取り組みやすい教材を用いながらアンサンブル活動を主体にした授業をめざしている。楽器には、ヴァイオリンのように美しい音を出すことがむずかしいものもあれば、例えば打楽器のように、叩けば（あるいは振れば、あるいはこすれば）簡単に音が出てしまうものもある。しかし一つの楽器の奏法を研究すればするほど、その演奏技法は奥が深いものである。学生たちが、やがて教壇に立って自分にとって経験のうすい楽器を急に指導しなければならぬときなど、楽に音が出るからといってその楽器を安易な気持ちで扱ってほしくないのである。このような慎重かつ楽器を思う敬虔な態度を、ヴァイオリンを通してこの授業から学んでほしいのである。

有名な鈴木メソッドをはじめ、さまざまな視

点からアプローチされたヴァイオリン指導書や教則本は数多く出版されている。また、学校教育の器楽指導という集団学習の場を対象とした先行研究も、実践報告としてはあっても学術論文として発表されたものはほとんど存在しない²⁾。今後は彼らの演奏能力の向上をはかるうえで、収録した彼らの演奏記録を分析するとともに、授業における評価（学生自身による自己診断の意味も含めて）を実施し、クロス集計や因子分析の結果をこの授業に反映させたいと考えている。

注

- 1) 倚音が効果的に用いられている。2つの例（楽譜3）を参照されたい。×印は倚音を示す。この譜例の場合、初心者にとって音程づくりのむずかしい一点嬰ホ（左の譜例）や二点ハ音（右の譜例）はすべてAdvanced Accompanimentのパート担当の奏者に任せている。



楽譜3 (S.Fletcher作曲の「Polka」より)

左：③の1小節前、及び③の部分。

右：最後の2小節。

- 2) すでに以下の著書の中で、集団学習の場での効率よいヴァイオリン演奏技術の指導について論じたが、旋法（モード）と運指法とを関連させて考察したのは本論文の新しい視点である。（伊藤 誠「学校教育におけるヴァイオリン指導の可能性」『音楽教育の研究—理論と実践の統一をめざして—』1993（音楽之友社），144-152頁）

(2009年9月30日提出)

(2009年10月16日受理)

Principles of Violin Instruction at Teacher's Training Colleges and Departments

— Taking cues from the activity record of “String Instrument Seminar” —

Makoto ITO

Keywords : violin, development of teaching materials, in-class implementation,
instrumental performance instruction, teacher training

This paper focuses on the instructional process and the development of teaching materials for beginning violin classes through the implementation of a string instrument seminar taught by the author. Violin techniques for both the left hand (mainly the production of pitches in first position) and right hand (articulation, volume, and timbre manipulation) are surprisingly difficult for beginners.

The seminar is taught each year and has two main objectives. The first is to give the students a basic introduction to the features of string instruments. However, since the scope of what can be learned in more than 10 (90-minute classes) is limited, the main purpose of the seminar is not to improve violin playing proficiency. The aim is to achieve classes grounded in ensemble activities while using educational materials suitable for beginners, including pieces that employ modal harmonic elements and many intricate rhythms in lively tempos requiring active bow work. The other (perhaps more important) goal is to instill in students a respect for musical instruments. While there are other instruments that, like the violin, are difficult to master, there are also instruments — for example, certain percussion instruments — that use relatively simple movements, such as striking, shaking, or scraping, to create music. However, in many cases, studying the performance methods of a single instrument in depth — even seemingly simplistic ones — will bring to light hidden levels of subtle performance techniques. Someday, after becoming teachers, music students will be required to teach instruments with which they are not very familiar. Rather than treating such unfamiliar instruments lightly just because they seem (at first glance) relatively easy to use, we want students to acquire a more cautious attitude from this class by studying the violin.

Although the famous Suzuki method and many other violin tutorials and method books have already been published, examples of previous work in the group learning forum of school education are scarce. In aiming to improve students' performance abilities, we will analyze recordings of students playing the violin and implement in-class self-evaluations in order to develop meaningful results through cross-tabulation and factor analysis.